

非物質論と常識

——バークリが擁護しようとした、知覚対象に関するわれわれの常識的信念は何か？——

山 川 仁

はじめに

ジョージ・バークリの「P. 非物質論 (immaterialism) (一)」(DHP III 255, 257, 259-60) は、彼の哲学の代名詞とされるほどに有名であるが、同時に、彼は、自身が常識の擁護者であるという姿勢を鮮明にしたことでも知られる。だが、よく知られるように、彼の非物質論とわれわれが自然に抱く常識的信念とが調和するのかということについては、彼の時代から懸念が示されてきた。このことから、従来のバークリ研究では、非物質論とわれわれの常識とが両立するのかという問題に強い関心が払われてきたと言える。とはいえ、バークリが、彼独自の学説である非物質論を打ち出す際に、まさに擁護しようとした常識が何かということについては、必ずしも明らかにされたわけではないと言えるだろう。

そこで、本論は、「英雄時代②」と称されるバークリ前期

の哲学、なかでも、物質の存在を否定する議論がおもに展開される、「人間の知識の原理に関する論考」(以下、本文中では『原理』と略記) 第一部と『ハイラスとフィロナスの三つの対話』(同様に、『対話』と略記) の二著作を中心に取り上げ③、そこで提示される基本的見解と、通常、われわれが日常的に接する知覚対象に対して抱いているはずの顕著な常識的信念とがどのように関係するかを吟味しながら、バークリが、非物質論を唱える際に、最も擁護しようとした常識的信念はどのようなものかを検討したい。このような意味で、本論は、バークリ哲学の中の複数の主張の整合性を考察の対象とするが、その最終的な目的は、上述の論点におけるバークリの意図を探ろうとするものである④。

この課題に接近するために、本論は、次のような手順で論述を行う。はじめに、非物質論の基本的見解と、バークリの常識擁護の立場を確認する。そして、非物質論の基本前提を

容認すれば、知覚対象に関するわれわれのおもだった常識的信念に反する帰結に陥ると疑われる問題点を三つ提示し、また反対に、非物質論の基本前提がそのような信念と調和すると考えられる一つの論点を示す(第1節)。次に、前節で見出された問題点をめぐって提起された、相対立する伝統的な解釈を紹介する(第2節)。続いて、第1節で見出された三つの問題点に対して、どのような解釈上の対応策がありうるかを個別に検討し(第3―5節)、また、非物質論の基本前提が、知覚対象に関するわれわれのある常識的信念をどのように支持しうるのかを見る(第6節)。最後に、上記の検討結果を踏まえ、非物質論の議論の内部には、知覚対象に関するわれわれの顕著な常識的信念に関する問題点や論点に対処する文脈で、どのような論法が見出されるかを分析することを通じて、「非物質論において、バークリがまさに擁護しようとした知覚対象に関するわれわれの常識的信念とは何か?」という問いに答えることとした(第7節)。

第1節 問題の所在

最初に、非物質論の基本的な見解を確認しておこう。周知の通り、『原理』第一部の冒頭では、「人間の知識の対象」(PHK 1)として、「観念(ideas)」の存在が提示され⁽⁵⁾、それに続いて、その観念を「知ったり、知覚したり、また、それについて、意志したり、想像したり、思い出したりする」といった種々の作用を果たす何か(PHK 2)として「心(mind)」の存在が示される。そして、上記の「観念」の中で、われわ

れの日常的な知覚対象である諸物は、「可感的な物(sensible things)」(PHK 1他)ないし「感官の観念(ideas of sense)」(PHK 30他)と称される。

次に、非物質論の基本前提と言われる二つの考え方を見よう。一つ目は、『原理』第一部と『対話』の冒頭部で示される、特定の色・味・匂い・形・堅さなどが相伴うことが観察されることで、それら諸観念の集合が「可感的な物」を構成する(PHK 1 DHP I 175)という見解である(以下、「集合テーゼ」と略記)。二つ目は、非物質論の基本原理として最も知られ「存在するとは知覚されることである(esse is percipi)」(PHK 3)というテーゼ(以下、EIP 原理と略記)によって表現される考え方である。バークリは、われわれの思考・情念・想像によって形成される「想像の観念(ideas of imagination)」(PHK 30他)と同様に、感官の観念(可感的な物)も、「集合テーゼに即して」それが互いにいかに組み合わせられ、どのような物を構成しようと、それを知覚する心の中だけに存在すると主張する(PHK 3)。

そして、彼は、「私は、あらゆる物事において、大衆に味方する」(PC 46)、「われわれは、大衆とともに、感官に確実性を認めなければならぬ」(PC 740)、「永遠に形而上学を追い払い、人びとに常識を呼び戻すこと」(PC 751)、「私が常識を擁護しようとするのは、これら『物質肯定論』やそれに類する革新に対抗してのことである」(DHP III 244)などと述べ、彼自身の説が世俗の意見に近いことや、常識を擁護する姿勢を示す。

ところが、上記の二つの基本前提に則れば、われわれの常識に反することになるのではないかとという疑いが自然に生じる。そのような解釈上の問題で、パークリ自身が実際に対処し、研究者によっても対応が検討されてきた代表的なものとして、次の三点が挙げられる。それは、知覚対象、すなわちパークリの用語で言われる、可感的な物(感官の観念)の、①…實在性、②…継続性、③…公共性に関するわれわれの信念をめぐめる問題である。われわれの知覚対象である諸物の存在が、自らの諸観念の集合であり、それらの存在が知覚されることにあるのなら、それは実在すると言えるのか(問題①)、われわれが知覚しないとき、それらの物は存在しないことにならないか(問題②)、私と他者は同じ物を知覚し(でき)ないことにならないか(問題③)、という疑いが持たれる。なぜなら、われわれは、通常、身の回りの諸物は、自らによって知覚されることや自らが知覚する色や匂いなどとは無関係に実在すると考えるであろうし、また、われわれが知覚しないときは、上述の二つの前提に従うような限りでの物は存在しないように思われ、さらに、そのような物は、自分自身の心の中にしか存在しないと想定されるはずだからである。

その一方で、上記の前提が、われわれの素朴な常識的信念の擁護に貢献すると考えられる点も見出される。それは、物は感官によって直接知覚される(知られる)通りに存在するという信念や、それらの物には色などの性質が備わるという信念に関係する、④…対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する論点(論点④)である。

以上のように、非物質論が、われわれによって自然に抱かれる常識的信念との関係で考察されれば、上のような問題点や論点が浮かび上がる。以下では、まず、これらの各々に対するパークリの応答やそれに付随する解釈を順に精査し、最後に、その検討結果を分析することで、上で見た①—④の、知覚対象に関するわれわれの常識的信念の中で、パークリがまさに擁護しようとしたものは何かを考察したい⁽⁶⁾。そのための予備作業として、次節では、上記の難点をめぐって提出された、二つの相対立する伝統的な解釈を見よう。

第2節 二つの伝統的な解釈

さて、パークリの常識擁護の側面に力点を置く読み方として最も知られるのが、A. A. ルースの解釈である。ルースは、パークリの言う「心の中の存在」、なかでも、われわれの知覚対象である、可感的な物(感官の観念)を、知覚者の想像や能力の産物とする従来からの解釈を批判する。ルースは、心と観念とがまったく別のものと言われている(DHK 2,27,89,142 など)点を強調し、その上で、パークリによる「心の中に」という術語が、心と観念との間の何らかの同質性(空間的な位置や部分の共有など)を意味するのではなく、「心にとって直接的な認知関係がある (in direct cognitive relation to the mind)」の略語として解釈されるべきだと主張する (Lucas, 1968a 286)。このルースの考え方によれば、パークリの議論上、可感的な物(感官の観念)とわれわれの心とが独立していることは、はじめから保証され、そ

の上で、われわれは自らの心とは別に実在する諸物を直接知覚し、さらに、それらの物は、われわれの心とは別に継続して実在し、複数の心によって互いに同じ対象が知覚されるということになるのである。

しかし、このようなルースの解釈には、S. A. グレイヴのような批判者がいる。グレイヴは、ルースがとくに留意した、観念と心とが互いに異なるというバークリの主張を、「相異性原理 (distinction-principle)」と呼び、同時に、これに対立する「同一性原理 (identity-principle)」が非物質論には見出されると言う (Grave, 1968, 286)。それは、EIP 原理や集合テーゼからの帰結として、観念ないし物と、それに対する個々の心による知覚とを一体的に捉える見方である。たしかに、バークリは、観念ないし物とそれが知覚されることは分離できないとし (PHK 5)、また、「私が知覚する諸物が私自身の観念であることは明らかである」 (DHP II 214 以下、本稿中のすべての点は論者による) と言う。この考え方に従えば、グレイヴの言うように、諸観念ないしそれらの集合体である諸物の存在は、個々人の知覚に依存することになる。従って、私の知覚対象である可感的な物 (感官の観念) は、私の心の中に存在するものでしかないと考えられ、上記の問題①—③が浮上することとなる。

そこで、グレイヴは、バークリの説において、「相異性原理」と「同一性原理」が両立する可能性はなく、非物質論の基本前提と密接に関わる後者の原理が優先されるべきだと考え、前者を放棄し、後者を採用するという戦略を採る。そして、

問題①—③への対処法として、彼は、バークリが示す、神の心の中の「原型 (archetype)」 (DHP III 248) に訴えることで、われわれの知覚対象である、可感的な諸物の実在性・継続性・公共性が確保されるという路線の解釈を示す (Grave, 1968, 296-306)。

第3節 知覚対象の実在性 (問題①) について

前節で注目されるべき点は、バークリにとって、観念や物の存在が、個々の心に依存するの否かということだと言える。そして、このことが、非物質論と常識の折り合いの問題を考える際の一つの鍵になると考えられる。さて、われわれが、「非物質論において、われわれの知覚対象である諸物は実在すると言えるのか？」という問い (知覚対象の実在性の問題・問題①) を考える上で、問題の所在を、観念ないし物がわれわれの知覚とは独立に実在するかという問いから、われわれ個々人の観念のうちに実在のものとするでないものとの区別がつくかという問いへと移行させることが許されるならば、観念と心の間の「相異性」といった存在論的な議論や、神の心の中の「原型」といった形而上学的概念に訴えずとも、この問題には対処可能である。そして、実際に、この問題に対するバークリの対応もそのようなものである。

先述の原理によれば、自然界の実在的で実体的なものが、すべて世界から追放されることになり、代わりに、観念の妄想的な体系が生じると反論されるであろう。存

在するすべての物は、心の中にのみ存在する。(略)それでは、太陽、月、星々はどうなるのか。(略)先述の原理によっても、(略)われわれが、見たり聞いたり触れたり(略)するものは、すべて以前と同じく確実なままであり、また、以前と同じく実在する。(略)そして種々の実在物と妄想の間の区別は、十分な効力を依然として持つ。このことは、29.30.33節から明らかである。(PHK 34)

この引用末尾に見られるように、バークリは、問題①を、実在的な観念と妄想的な観念との間の弁別可能性に関する課題だとみなしていると言える。そして、上の引用箇所を参照指示のある数節 (PHK 29.30.33) は、「ジョナサン・ベネットによる」「受動性論証 (passivity argument)」(Bennett, 1968, 382-3; Bennett, 1971, 165-7) の呼称で知られ、われわれが知覚する観念ないし物の原因や、それらの結合規則である自然法則の原因となる神の存在を導く論証が行われているとされる箇所である。この論証を簡単に確認しておこう。「想像の観念」が私(人間)の意志の自由になる (PHK 38) 一方で、「感官の観念」は、私の意志に依存せず、その知覚に関して、私の心は受動的 (以下、「感官による知覚の受動性」と略記) である (e) (PHK 29)。このこと、バークリにとって、観念の原因はすべて心に帰せられる (PHK 26) という前提から、感官の観念(可感的な物)には、その原因となる私以外の「ある他の意志ないし精神 (some other will or spirit)」(PHK 29)・

すなわち、神の存在があると論じられ、さらに、その神を原因とする「自然法則 (Laws of Nature)」(感官の観念の間の一定の順序ないし規則) があるとされる (PHK 30.33)。

これは、非物質論において、感官の観念(可感的な物)が存在することの原因を導く形而上学的議論である。しかし、その過程で示される「私自身の意志の自由にならない」「感官による知覚の受動性」という規準を利用し、われわれ個々人がある時点で現に持つ知覚経験がその規準と参照されることで、われわれの観念の中で、実在物とそうでないものとの一定の区別がつくことになると考えられる。さらに、上記の文献上の記述から、個々人によって以前から経験されてきた一連の諸観念の規則的な継起が「自然法則」として認められれば、妄想や幻覚といった不規則な観念は、個々人によって、その時々々に現に持たれる諸観念の規則的な継起としての法則と参照されることで、実在物から排除されうると言えるであろう。そして、以上のような議論から、非物質論の下でも、「われわれの知覚対象である諸物は実在する」という常識的信念は確保されうるのである。

第4節 知覚対象の継続性(問題②)について (g)

さて、「非物質論の下でも、われわれが知覚しない間に物が継続して存在すると言えるのか?」という問い(知覚対象の継続性の問題…問題②)に対する従来からの主要な解釈上の対応策として、第一に、われわれの知覚の中断を埋める存在としての神の知覚に訴える方向のものと、第二に、前節

で触れた、神が与える自然法則に訴える方向のものが挙げられる。第一のものは、ベネットによって「継続性論証(continuity argument)」(Bennett, 1968, 380-3; Bennett, 1971, 169-72)と呼ばれた。次のような文献上の記述に訴える考え方である。

P・・・可感的な物が私の心とは独立していることを、私は経験によって見出すので、それらの物が、私の心の外に存在するのは明らかである。それ故、私が可感的な物を知覚している時の合間には、それらの物が中に存在する、ある他の心(some other mind)があることになる。

(DHP III 230-1)

この一節は、われわれが知覚しない間に、物を知覚する「ある他の心」(神)の存在を導く議論であると従来から考えられてきた。だが、そのような解釈には難点が伴う。というのも、この一節で、もしそのような論証が行われているとすれば、それは、われわれが知覚しない間に物を知覚する神の存在を導き、それによって、物が、神によって(EIP原理に即して)知覚され、その心の中に存在することで、われわれの知覚と独立して継続的に存在できると言うための議論のほずである。しかし、そこでは、結論以前に論証すべきこと(物が、私といった人間の心の外に存在すること)が前提されており¹⁰⁾、上の一節が厳密な論証とみなされる限り、そこには循環論法が見出される¹¹⁾。

そこで、問題②に対しては、第二に、マーガレット・アサー

トンが行ったような、「継続性論証」に頼らない、神が与える「自然法則」に訴える方向の解釈上の対応策が模索されることになる¹²⁾(Atherton, 1995, 231-48)。このような見解は、知覚者が現に持つ、以前から反復して得られてきた一連の諸観念の継起の規則の蓄積を基に、(対象が知覚されない時点を想定するという)反実仮想の条件文によって表わされる事態を真とみなす考え方だと言える。そして、このような解釈は、「もし私が書斎にいるならば、机を知覚できるだろう¹³⁾」(PHK 3)といった文献上の記述に依拠した考え方だとみなされる。

このような推理に基づいた信念は、われわれが実際に日頃から抱いているものだと言える。しかし、非物質論の前提からの帰結が厳密に捉えられれば、問題は残る。というのも、ベネットが言うように、EIP原理に従えば、例えば、「もし私が書斎にいるならば、机を知覚できるだろう」という事態が継続的に真であるには、継続的な知覚者が必要であると想定され、従って、特定のある時に、その書斎に机が存在することが真であると言われるには、その時点で、机を知覚する誰かの心が要求されるであろうからである¹⁴⁾(Bennett, 1971, 180)。

以上から、本節で見てきた二方向の解釈では、問題②に対しては、厳密には、解決が得られないと考えられる。そこで、私の提案を簡単に示そう。それは、「受動性論証」によって導かれる神の心という想定に対して、バークリが示す「物の二重の状態」(DHP III 254)を文献上の根拠として推定さ

れうる、神の心に関する形而上学的前提を付加することで、問題②に対処するというものである。パークリは、物には二重の状態があり、一方は、模写的かつ自然的であり、時間の中で創造されたもので、他方は、原型的かつ永遠で、神の心の中に絶え間なく存在することを認めると言う（DHP III 254）。また、「精神が、観念を知覚するとき、知性（*understanding*）と呼ばれ、観念を生み出すか、観念に作用するとき、意志（*will*）と呼ばれる」（PHK 27）という記述から、彼が、心に「知覚」と「意志」の二側面を認めていることがわかる。そして、以上のことを踏まえ、パークリの考え方では、人間の心の営みとして、われわれが、想像の観念を想い抱くときは、意志を働かせると同時に、その観念（心像）を知覚し、感官の観念（可感的な物）を知覚するとき、「感官による知覚の受動性」により、意志は機能せず知覚だけを行うことになることを考慮に入れよう。すると、このようなわれわれ人間の知覚からの類推によつて、神は、われわれが物を知覚しているときは、意志と知覚を同時に働かせながら、われわれの心に作用し、そうでないときは、神自身の心の中の原型をただ（受動的に、ただし神の心の外から受動するのではなく）知覚しているという想定が可能である（15）。

そして、このような形而上学的想定が認められるならば、われわれが物を知覚していないときは、その物は、神が彼の心の中の「原型」を、意志せず、ただ知覚しているという仕方である。そして、もしそのような解釈が認められるならば、非

物質論の下でも、「われわれが知覚しない間も、諸物は継続して存在する」というわれわれの常識的信念を擁護する方策は残されていると言えるであろう。

第5節 知覚対象の公共性（問題③）について

「H：私の心の中にあるのと同じ観念は、あなたやその他の心の中にはありえない。従つて、あなたの原理からは、いかなる二人も同じ物を知覚できないことにならないか？」（DHP III 247）という問い（知覚対象の公共性の問題…問題③）に対し、パークリは、ある種、世俗的な見解と哲学的見解との折衷案のような答え方をする（DHP III 247-6）。

彼は、「同じ」という言葉が、「同一性」という哲学的で抽象的な意味で用いられるのではなく、世俗的な意味で用いられるなら、異なる人々が同じ物を知覚できるのは確かであると言う。そして、同じような感官の機能を持つが、いまだ言語を知らない複数の人々がいるという想定を行い、彼らは、知覚に関して一致するが、後に言語が習得されれば、ある者は、知覚されるものの一様性から、それを同じ物と呼び、別の者は、知覚者の複数性から、それを異なる物と呼ぶだろう、と彼は言う。加えて、彼は、問題③を言語の適用の問題と捉え、例えば、改築された家を、あなたは以前と同じ家と言い、私は違う家と言うとき、言葉の違いを別にすれば、家という思考においては互いに一致している、と論じる。

このような主張は、明らかに、言語によつて複数の人びとがある物を互いに現に同定できることを前提しており、その

上で、バークリは、問題③に関して、原理上、複数の知覚者が同じ物を知覚できるかという問いから、人びとが、互いに同意されたある物に対して、「同じ」か「異なる」のいずれの言葉を適用させるのが適切かという問いへと論点を移行させていると考えられる¹⁶⁾。以上の議論は、個々の人びとがある物を現に同じと呼び合えることを自明と認めている点で、現実的で世俗的な見解である。

また、バークリは、問題③が、非物質論に対する難点になるのであれば、その困難は、同じく、バークリが批判する、物質を容認する立場にも該当すると主張する。たしかに、ロツクが「心がそれ自身のなかに知覚するあらゆるもの、すなわち、知覚、思考、ないし知性の直接的な対象であるすべてのものを、私は、観念と呼ぶ」(Locke 1975, 134) と言うように、物質肯定論においても、われわれの直接知覚の対象はわれわれ自身の観念ということになり、問題③は、同じく物質肯定論にも抵触することになると考えられる。

さらに、バークリは、物質肯定論者が「外的原型(物質)」の想定によって、異なる知覚者も同じ物を知覚すると主張するように、非物質論においても、すべての心の外という意味ではない、人間の心の外と言う意味での「外的原型」、すなわち、すでに見た、神の心の中の「原型」を想定できると言う。先に見た、グレイヴの解釈に従えば、この「神の中の原型」という想定に依拠することで、「複数の人々が同じ物を知覚する(できる)」というわれわれの常識的信念が擁護されることになる(Grave, 1968, 306)。

第6節 対象に対する知覚の直接性(論点④)について

さて、これまでの数節の議論とは異なり、**ロ**原理や集合テーゼには、われわれの素朴な常識的信念と調和する側面も見られる。それは、「非物質論の下で、われわれは、身の回りの諸物を直接知覚する(知る)と言えるのか?」という問い(対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する論点・論点④)に関係する。

P・私の意見では、實在物とは、まさに、私が見たり触れたりして、感官によって知覚するものである。(略) 同じく、私の意見では、色やそれ以外の可感的諸性質が対象にあることになる。私は、雪は白く、火は熱いと心底から考えざるをえない。なるほど、あなたは、雪や火によって、特定の外的で知覚されない、知覚しない実体を意味するので、白さや熱さがそれらに内属することを否定する道理になる。しかし、私は、それらの言葉で、私が見たり触れたりする物を理解するので、他の庶民と同じように考えざるをえない。(略) 私が名づけ、会話する、木・石・火・水・肉・鉄や、これに類する諸物は、私の知るものである。そして、私が自らの感官でそれらを知覚することがなければ、それらを知るはずもなかっただろう。感官によって知覚される諸物は、直接知覚される。(DHP III 229-30)

この一節から、次の二点が見出される。一つには、パークリは、われわれが「諸物を直接知覚したり、諸物を知る」と言えるための根拠を、われわれ自身が現に（すなわち、具体的なある時点で）見たたり触れたりすること、すなわち、EIP原理に求めていると見られることである。二つ目に、彼は、彼自身の説が、物に色や熱さなどがあるとする一般大衆の意見と同じだと認めていることがわかる。このことは、例えば、白さや冷たさなどが集まって、「雪」という可感的な物が構成されるという集合テーゼに一致する見方であり、彼は、このような世俗的な信念の根拠を、このテーゼに求めることができる。

ところで、パークリは、上の見方とは別の、彼の視覚論において顕著に見られる、「直接知覚」の考え方も示す。それは、例えば、視覚にとつての光や色のように、各感官に固有の観念だけを、厳密な意味での「直接知覚」の対象とする見解である（NTV 43,77,103,129,130,156, TVV 41,42,44, DHP 1 175, 204 など）。これら二つの「直接知覚」の考え方が、彼の説で両立するかという問題については、様々に議論され（Armstrong, 1961, 19-27; Bennett, 1971, 139-45; Dicker, 1982, 48-65; Pappas, 1987, 195-213 など）、それ自体で検討に値するテーマである¹⁷。

とはいえ、EIP 原理や集合テーゼと常識とが調和するのかという目下の課題においては、これらの基本前提は、論点④に関しては、問題①—③とは異なり、むしろ有利に働くと考えられ、その結果、非物質論において、「われわれは、身の

回りの諸物を直接知覚する（知る）」という常識的信念は擁護されうると考えられる。

第7節 パークリが擁護する常識とは、

どのようなものか？

以上で、非物質論の基本前提とわれわれの常識的信念とが齟齬をきたすと思われる点とその解決策、また、それらが常識と調和すると思われる点を精査してきた。そこで、最後にこれらの検討結果を分析した上で、これまでに挙げた常識的信念の中で、パークリがまさに擁護しようとしたものは何かという問いに答えたい。さて、これまでの吟味の結果、パークリの説には、上記の各々の問題点ないし論点に対して、より哲学的で厳密な議論と、より世俗的で柔軟な議論の、二つの方向の論法が見出されることがわかる。

われわれの知覚対象の、①…実在性、②…継続性、③…公共性に関する問題に対処する方策として、一方で、心と観念の存在論的「相異性」や神の心の中の「原型」といった形而上学的想定に訴える、より哲学的に厳密な議論が見出された。対照的に、問題①に対しては、「感官による知覚の受動性」や「自然法則」（個々人が持つ規則的な諸観念の順序）に基づく論法、問題②に対しては、「自然法則」（反実仮定の推理）に訴える議論、問題③については、それを、すでに互いに同じと認定された物に対する言語適用の問題へと変換する論法といった、より世俗的な議論が見出された。また、対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する論点（論点④）に関し

ても、各感官に固有の觀念だけを直接知覚の対象とする、より厳密で哲学的な議論と、EIP原理や集合テーゼを基に、われわれは感官によって諸物を直接知覚し（知り）、それらの物には色などの性質があるとする、より世俗的な議論が見出された。

また、われわれの常識的信念に関わる①—④の問題点ないし論点は、別の角度から、二つの組に分類可能である。一方は、問題①と論点④の組（知覚対象の実在性の問題と、対象に対する知覚の直接性に関する論点）であり、他方は、問題②と問題③の組（知覚対象の継続性と公共性の問題）である。前者の組は、われわれ個々人がある時点で現に有する知覚経験に訴えることで一定の解決が可能な問題ないし論点であり、

後者の組は、それが不可能な問題である。すでに見てきたように、①…知覚対象の実在性と、④…対象に対する知覚の直接性に関する常識的信念は、EIP原理や集合テーゼ、そして、「感官による知覚の受動性」や「自然法則」を根拠に、われわれ個々人がある時点で現に持つ知覚経験がそれらの規準と参照されることで確保されるものと言える。他方、知覚対象の、②…継続性と、③…公共性に関する常識的信念に関しては、そうではない。なぜなら、われわれが知覚していないときも物が存在し続けるかという問いは、そもそもわれわれ個々人がある時点で現に持つ知覚経験の範囲を超える（バークリの用法で言えば、われわれすべての人間の心の外の）問題であり、また、私の知覚対象と他者のそれが同じか否かという問いには、互いの言語使用の想定がなければ、私

という個人がある時点で現に持つ知覚経験を根拠にするだけでは、原理上、答えられないと想定されるからである。

そこで、EIP原理や集合テーゼの容認が、われわれの知覚対象である觀念ないし物の存在を、われわれ個々人がある時点で現に知覚するものに制限することを意味するのだとすれば⑧、「バークリがまさに擁護する常識とは、どのようなものか？」という問いに対して、それは、①…われわれの知覚対象の実在性と、④…対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する信念であり、われわれの知覚対象の、②…継続性と、③…公共性に関する信念は、二次的なものとなると考えられるであろう。理由は、以下の通りである。

はじめにバークリの常識擁護の見解を見たように、彼は、彼の説が世俗の意見に近いものであり、われわれの感官を信用するという立場をとる。『原理』の表題にある「人間の知識」の問題を考える上で、「物質」の想定によって、①…われわれの知覚対象の実在性や、④…対象に対するわれわれの知覚の直接性が損なわれ、一種の懐疑論に至ると彼が危惧したのであれば⑨、EIP原理や集合テーゼを基に、彼は、彼が想定する懐疑論的見解（物質肯定論）に対する防御として、われわれ自身がある時点で現に知覚する対象が、まさに知覚される通りに実在するという信念を、常識の中にどうにか確保しようとしたであろうことが推察される。もしそうであれば、そのような彼が最も擁護するはずの信念は、それら（①と④）に関するものであったと考えるのが自然であろう。

対して、知覚対象の、②…継続性や、③…公共性に関する

信念は、たしかに、われわれが日々の生活で暗に前提するもので、様々な常識的信念の中でも根底的なものだと言える。しかし、そのような信念が論議の対象とされるとき、すでに見たように、その問題に対しては、非物質論の下では、厳密には、より哲学的な議論をもって対処するほかない。だが、パークリが「味方する」と言う一般大衆にとっては、彼ら個々人がある時点で現に知覚するときに物が存在すれば、そして、彼ら個々人が互いにある時点で現にある物を同じと呼び合えるのであれば、何ら不都合はない。このような意味で、われわれの知覚対象の、②…継続性と、③…公共性に関する信念は、われわれが自ずと前提しているという点では常識的なものとはいえ、大衆があえて問題としないという点ではより哲学的な関心から話題に上げられる信念だと言え、このような点からも、それらの信念が彼にとって二次的なものであったとしても不思議はない⁽²⁰⁾。

さらに、問題②と③に、パークリが深刻に取り組む動機が薄いと考えられる別の理由としては、上で見たように、知覚対象の公共性に関する問題③に対して、彼がそれを非物質論に固有の問題と見ていないという点が挙げられる。先述のように、物質肯定論にとっても、われわれの直接知覚の対象はわれわれ自身の観念だけということになると考えられる。もしそうであれば、知覚対象の継続性に関する問題②に關して、観念に関する限り、問題は物質肯定論にも同じく該当すると考えられ⁽²¹⁾、従って、物質という外的存在を否定しているパークリにとっては、それが非物質論に特有の問題と捉

えられなかったことが推察される。このことから、われわれ自身が特定の時点で現に抱く知覚経験を根拠に、知覚対象の実在性や、対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する信念を物質肯定論から防衛しようとしたと見られるパークリにとっては、非物質論に固有でないと考えられる問題②と③は、第一に対処されるべき常識に関わる課題ではないとみなされるのが自然であろう。もしこの見方が妥当であれば、問題②に対して、『原理』では積極的に話題にされないことや、問題②に対してあいまいな答え方がされていること、また、問題③に対しては『対話』でしか正面切って議論されていない点などに対しても、一定の理解が可能になると思われる⁽²²⁾。

以上の考察から、本論がはじめに立てた、「非物質論において、パークリがまさに擁護しようとした知覚対象に関するわれわれの常識的信念とは何か？」という問いに対しては、それは、①…われわれの知覚対象の実在性や、④…対象に対するわれわれの知覚の直接性に関する常識的信念であり、その、②…継続性や③…公共性に関する信念は、彼にとって派生的なものではなかったか、と本論は答えたい。ただし、本節で確認されたように、彼の哲学には、より厳密で哲学的な議論も見出され、少なくとも、『対話』においては、後者の信念が問題にされた場合の準備も同時に行なわれていたと想定されることから、パークリがそれらの信念に無関心であったわけではけっしてないであろう。そして、そのようなより厳密で哲学的な議論が、彼の非物質論の体系内で、どのように位置づけられ、評価されるかということについては、今

後の課題とした。

【文献表】

- Armstrong, D. M. 1961. *Perception and the Physical World*, London: Routledge & Kegan Paul.
- Altherton, Margaret. 1995. 'Berkeley without God.' in *Berkeley's Metaphysics: Structural, Interpretive, Critical Essays*, Robert G. Muehlmann ed. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press: 231-48.
- Ayers, M. R. 1987. 'Divine Ideas and Berkeley's Proofs of God's Existence.' in *Essays on the Philosophy of George Berkeley*, E. Sosa ed. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company: 115-28.
- Bennett, Jonathan. 1968. 'Berkeley and God.' in *Locke and Berkeley: A Collection of Critical Essays*, C. B. Martin and D. M. Armstrong eds. Notre Dame: University of Notre Dame Press: 380-99.
- . 1971. *Locke, Berkeley, Hume: Central Themes*, Oxford: Clarendon Press.
- Berman, David. 1994. *George Berkeley: Idealism and the Man*, Oxford: Clarendon Press.
- Berkeley, George. 1948-57. *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*, 9 vols. Luce, A. A. and Jessop, T. E. eds. London: Thomas Nelson. [「メーソン・ノートリ（大槻春彦訳）『人知原理論』岩波書店 1958年」, [「———（上條信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹訳）『視覚新論』岩波書店 1990年」, [「———（戸田剛文訳）『ノートルダムフロランスの三つの対話』岩波書店 2008年」]
- Butcher, Talia. Mae. 2008. 'Berkeley's Dualistic Ontology.' *Analysis* Filosofico, X X V Ⅲ, No 2: 147-73.
- Dancy, Jonathan. 1987. *Berkeley: An Introduction*, Oxford: Basil Blackwell.
- Dicker, George. 1982. 'The Concept of Immediate Perception in Berkeley's Immaterialism.' in *Berkeley: Critical and Interpretive Essays*, Colin Turbayne ed. Minneapolis: University of Minnesota: 48-66.
- Davis, John. W. 1959. 'Berkeley's Doctrine of Notion.' *Review of Metaphysics*, 12: 378-89.
- Furlong, E. J. 1968. 'Berkeley and the Tree in the Quad.' in *Locke and Berkeley: A Collection of Critical Essays*, C. B. Martin and D. M. Armstrong eds. Notre Dame: University of Notre Dame Press: 400-8.
- Grave, S. A. 1968. 'The Mind and its Ideas: Some Problems in the Interpretation of Berkeley.' in *Locke and Berkeley: A Collection of Critical Essays*, C. B. Martin and D. M. Armstrong eds. Notre Dame: University of Notre Dame Press: 296-313.
- Grayling, A. C. 2005. 'Berkeley's argument for immaterialism.' in *The Cambridge Companion to Berkeley*, Kenneth P. Winkler ed. Cambridge: Cambridge University Press: 166-89.
- Johnston, G. A. 1923. 'The Development of Berkeley's Philosophy,' London: Macmillan And Co. Limited.
- Lambert, Richard T. 1982. 'Berkeley's Commitment to Relativism.' in *Berkeley: Critical and Interpretive Essays*, Colin Turbayne ed. Minneapolis: University of Minnesota: 22-32.
- Locke, John. 1975. *An Essay concerning Human Understanding*, Peter H. Niddich ed. Oxford: Oxford University Press. [「メーソン・

ロック(大槻春彦訳)『人間知性論(一・二・三・四)』岩波書店
1974年]

Luce, A. A. 1968a. 'Berkeley's Existence in the Mind' in *Locke and Berkeley: A Collection of Critical Essays*, C.B. Martin and D. M. Armstrong eds. Notre Dame: University of Notre Dame Press: 284-95.

———. Reissued 1968b. *Berkeley's Immaterialism*, New York: Russell & Russell.

Pappas, George. S. 1982. 'Berkeley, Perception, and Common Sense,' in *Berkeley: Critical and Interpretive Essays*, Colin Turbayne ed. Minneapolis: University of Minnesota: 3-21.

———. 1987. 'Berkeley and Immediate Perception,' in *Essays on the Philosophy of George Berkeley*, Ernest Sosa ed. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company: 195-213.

Tomida, Yasuhiko. 2002. 'Locke, Berkeley and the Logic of Idealism,' *Locke Studies*, 3: 225-38.

山川仁 2011a 「バークリーの非物質論における直接知覚の対象」『アルケー』(関西哲学会) 第19号 204-14頁。

山川仁 2011b 「バークリーと危険回避の手段—ロックによる説明との比較—」『ビューマンセキュリティ・サイエンス』(ビューマンセキュリティ・サイエンス学会) 第6号 61-76頁。

【註】

(1) バークリーの文献について、本論では、以下のものを参照し、引用する。

A. A. Luce and T. E. Jessop eds. 1948-57. *The Works of George*

Berkeley, Bishop of Cloyme, 9 vols. London: Thomas Nelson. なお引用・参照箇所を示す略語は、以下の通りである。

・ *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*. (PHK 第一部の節番号)

・ *Three Dialogues between Hylas and Philonous*. (DHP I-IIIの対話番号 頁数 ※作中の対話者である 物質肯定論者のハイラスを「H」、バークリーの代弁者のフィロナスを「P」と略記する。)

・ *Philosophical Commentaries*. (PC 項目番号)

・ *An Essay towards a New Theory of Vision*. (NTV 節番号)

・ *The Theory of Vision... Vindicated and Explained*. (TVV 節番号) なお、訳出に際し、大槻春彦訳『人知原理論』(岩波文庫)・戸田剛文訳『ハイラスとフィロナスの三つの対話』(岩波文庫)を参考にした。

(2) デイヴィッド・バーマンは、バークリーの経歴で、『視覚新論 (*An Essay towards a New Theory of Vision*)』第一版出版の1709年から『対話』第一版出版の1713年までを、彼の「英雄時代 (the Heroic Period)」として区分している (Bernan, 1994, 21-70)。

(3) 『哲学的評注 (*Philosophical Commentaries*)』は、視覚論や道徳哲学などの主題も扱われているが、A・A・ルーヌ曰く、おもに非物質論を注釈するノートである (Luce, 1968b, 5)。そこで、本論は、おもにバークリーの常識擁護の見解を参照する際に、この文献も用いる。

(4) 私見では、非物質論と常識との調和の問題を扱う先行研究では、この両者が両立するかという論理的整合性を問う課題と、バークリーが擁護する常識に関する彼の意図を採

る課題とが明確に区別されないことで、問題点が不明瞭になっていえるように思われる。そこで、本論は、その過程で、前者を考察の対象とするが、最終的には、後者の課題の考察を目的とする。

(5) パークリ研究において、よく知られるように、ここでその存在を提示されるものが、「観念」に尽きるのか、後にパークリがその存在を明示的に認める「思念 (notion)」を含むのかは見解が分かれる (Cf. Johnston, 1923, 143-7; Luce, 1968b, 39-40; Davis, 1959, 378-89 など)。

(6) ジョージ・パパスは、非物質論と常識との調和を問題にする際に、顕著な常識の見解として、本論で言う、③、④に関する見解と、われわれが多くの場合に諸物についての直接的かつ確実な知識を持つという見解を挙げ、その理由を、それらが哲学的に重要だからとして、パークリの常識擁護のあらゆる側面を扱うのではないと言う (Pappas, 1982, 35)。私が、本論で四つの常識的信念を取り上げるのは、それらが、パークリや解釈者などにとつてとくに問題とされ、擁護されるべきものとして取り上げられてきたからである。

(7) 非物質論が二元論的ではなく、唯心論的に解釈されると、ここに見出される「同一性原理」の下で、観念は「心の状態」と解釈されることになる (Cf. Grayling, 2005, 184; Betcher, 2008, 148)。しかし、非物質論が、「物質・観念・心」という三つの存在者を容認する物質肯定論の立場から物質を消去する説だと考えられるなら、(その物質否定の議論の成否は別として) それは二元論的な説と考えることもできる。このように、非物質論が二元論的に捉えられれば、

「同一性原理」の下でも、観念は対象 (しかし、各個人の知覚に依存するもの) とみなされうる。本論は、非物質論を上記のような二元論的な体系と見え、議論を行う。

(8) 同様の議論は、『対話』にも見られる (DHP I 196)。

(9) 本節が扱う内容は、単独での考察に値するが、ここでは、本論全体の目的から、私の見解を手短かに論述したい。なお、私は、別途、ここでの議論をより詳細に展開する予定である。

(10) パークリには、この前提を用いる資格や根拠がないことを、ベネットは強調する (Bennett, 1968, 381; Bennett, 1971, 170)。

(11) 複数の解釈者は、パークリは問題②に関心があつたのかという問題意識から、この一節 (DHP III 230-1) ならびにこれに類する一連の議論 (DHP II 212-214; III 240) を好意的に解釈してきた (Furlong, 1968, 400-8; Ayers, 1987, 115-29; Dancy, 1987, 41-56 など)。しかし、これらの記述を、パークリの問題②への関心の表れと見ることはできるとしても、論証として有効なものと解釈するのは困難であろう。

(12) アサートンは、「われわれの感官の観念が法則に支配されているというパークリの主張は、われわれの観念が表わす可感的な諸物が、いかなる個々の有限の知覚者とも独立して存在するという主張に等しい」(Atherton, 1995, 243) と言へ。

(13) 同様の記述として、「もしわれわれがしかじかの環境に置かれ、地球と太陽の両方から離れたしかじかの位置や距離に置かれたとすれば、われわれは、地球が惑星の群れの間を動き、あらゆる点で、惑星の一つとして現れるのを知覚するであろう」(PHK 58)、「P...もし私が天地創造の現場

にいたとすれば、諸物が生み出されるのを見たであろう」(DHPⅢ 251) がある。

(14) アサートン流の「自然法則」に依拠する解釈は、ルースによる「観念ないし物が」存在するとは、知覚されるあるいは、知覚されうること」(Lucé, 1968b, 61) という現象論的な解釈に通ずる見方である。このような現象論をバークリに帰することを、ベネットは根拠がないと否定するが、たしかに、『対話』では、「H…私は、可感的な物の存在が知覚されうることにあるのを認めるが、実際に知覚されることにあるとは認めない」という反論に対し、「P…観念が、実際に知覚されることの外に存在できるのか?」と述べられている (DHPⅢ 234)。

(15) このような私の解釈への一つの補強材料になると思われる記述として、「あらゆる物の属性は神の中にある。すなわち、神の中には、意志だけでなく、知性もある。」(PC 812) がある。

(16) リチャード・ランバートは、バークリの説で、われわれの知覚経験は、哲学的な語彙という厳密な規準では異なるが、一般的な語法におけるよりゆるい基準では同じでありうると認め、問題③は、そのいずれかの規準の適用条件を明らかにすることで解決されると論じる。そして、彼はバークリは「同一性」を、真なる概念としてでなく、実践的にうまくいく概念とみなしていると言う (Lambert, 1982, 29-30)。バークリの言語説には、危険回避行動といった人間の実際的な目的との深い関わりが見られる (Cf. 山川, 2011b, 61-76 頁)。ことから、言語に関する問題を、人間の実践的な行為との関係で考察するバークリの傾向が窺える。

(17) この問題に関して、私は一つの見解を示している (Cf. 山川, 2011a, 204-14 頁)。

(18) バークリの説において、EIP 原理を現象論的に解釈することの困難については、本論註 14 を参照。

(19) 『原理』の副題には、「諸学における誤謬と困難の主要な原因と懷疑論・無神論・無宗教の根拠が探求される」とあり、『対話』の副題にも、「懷疑論に反対する」と記されている。

(20) F・ファローングは、「バークリが、可感的な諸物の実在性については懸念したが、その継続性について無関心というのは、一見してありえない」(Furlong, 1968, 402) と言う。私は、バークリは、問題②や③に対して、形而上学的な議論を用いた対処策を示している点からも、無関心ではなかったが、非物質論を唱道するという目的の下では、彼にとつては、問題①や論点④の方が優先順序は高かったのではないかと主張したい。

(21) 富田恭彦は、「(ロックにおける) 経験の対象が観念である限り、それは心の中にあり、心がそれを知覚するときのみ存在する。もしそうであるなら、このことは、バークリの観念論の基本テーゼに一致する。」(Tomida, 2002, 231) と指摘する。

(22) 『原理』での、諸物が個人の知覚のたぐいに断続的に存在するという説明 (PHK 46-7) を、ルースは、バークリが認める見解ではなく、続く節 (PHK 48) が彼の真意だと論じる (Lucé, 1968a, 290-1; Lucé, 1968b, 120-5)。しかし、それでも、「感官の対象が、われわれによって知覚される間のみ存在すると結論づけなくてはならない (may not conclude)」(「わ

れわれが知覚しなくとも、感官の観念を知覚するある精神がありうる（may be）（PHK 38）などといった歯切れの悪い表現が見られ、逆に、ベネットは、それらをバークリの問題②に対する無関心さの証拠と見る（Bennett, 1968, 380; Bennett, 1971, 174-5）。本論の見解としては、バークリは、物質肯定論者と同様に、われわれ個々人の知覚対象である諸物は、個人にとって相対的なものであり、個々人の知覚のたびごとに断続的に存在することを認めており、上記のあいまいな表現（PHK 38）や、問題③が『原理』で問題にされないことは、問題②や③に対しては、厳密には、「神の心の中の原型」のような形而上学的想定ないし議論を持ち出すことでしか対処できないと、彼が『原理』執筆時から気づいていたことを示唆するのではないかと考えたい。